

第3章 安心できる拠点へ



3.1 熊野東防災交流センターの提案

1) プロポーザル案

3.2 みんなでつくるプロセス

1) 案が発展していくプロセス

2) 基本設計案

3) 最終案

3.3 工事着工から完成まで

1) 工事の歩み

2) 航空写真でみる工事の進捗

3) 完成写真

3. 1. 1 プロポーザル案



らせんでつながる広場 - プロポーザル案 -

プロポーザル時に提案したのは「らせんでつながる広場」です。熊野町に新しくできる防災センターとして、誰もが心のバリアなく避難できる場となるように、2階に配置している防災ホールに向かって緩やかなスロープを設け、停電時であっても車椅子やご高齢の方々がスムーズに避難ができる計画としました。スロープは、非常時には河川からの水の侵入から建物や屋外広場を守るとともに、日常時には広場を囲む栈敷席ともなって、祝祭的な場を生み出すようになっています。

熊野町は、筆づくりで古くから全国に知られている場所です。よって、防災ホールを中心とした、ものづくりの町にふさわしい、創造的な空間をつくりたいと考えました。螺旋状になっている一筆書きの形状は、筆で描いた線を連想させます。そのように、非常時はもちろん、日常時でも熊野町の皆さんに愛されながら、利用される場を目指したいと考えました。

審査時には、シンボリックな空間を評価いただくとともに、緊急時における車両の動線や歩車分離の必要性などといった、いくつかの指摘もいただきました。プロジェクトが始まると、そのような課題を解決しながらプロポーザル案をブラッシュアップしていくところから設計がスタートしました。

実施方針及び設計コンセプト

人びとの生きる力を育む場となる

本プロジェクトの設計を通して災害の経験と記憶を真摯に受け止め、引き継ぐとともに、町の未来をともに考えていく役目があると考えました。その役割を、以下の3つのコンセプトとともに実現します。

- 1 空間提案、構造・設備計画、プログラムづくりといった様々なレベルにおいて、日常時と災害時を連続的なものとして捉え、日々の創造的な場の使いこなしが災害時の備えとなる計画とします。
- 2 子どもから大人、赤ちゃんのいる家族、高齢者、障害のある人、ペット同伴の人といった多様な価値観を受け止め、ともにいられる空間をつくります。
- 3 山々に囲まれた美しい自然風景に呼応し、地形、ランドスケープ、広場、そして建築が一体となった、まちの皆さんの心のよりどころとなる建築を目指します。

特に重視する設計上の配慮事項

ものづくりの町を象徴する「ここにしかない空間」を目指す

熊野筆がそうであるように、他にないものを妥協せずつくることが、長く愛され、引き継がれていくものづくりの姿であると考えます。『のびやかなスロープ』『風景とつながる防災ホール』『大きな屋外広場』によって、訪れるたびに皆の創造力を後押しする空間をつくります。



イベントや災害時により所となるスロープ



町の風景や光が入りこむ象徴的なホール

広域 / 配置計画

周辺施設と連携し、まち全体について考える

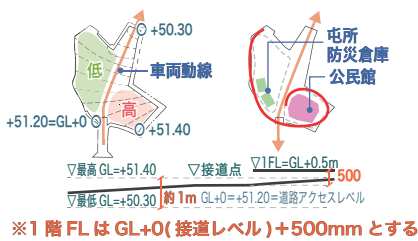
子育て世代に人気のある西部地域の「くまの・みらい交流館」、地域の健康を支える大きなグラウンドや浴場のある「東部地域健康センター」等、既存施設の特徴を考慮し、東部地域防災センターを防災と交流の拠点として、皆が日常から楽しみながら「生き抜く力を育む場」となることを提案します。建物をつつ建てることで、まちづくりのきっかけとなるようなプロセスを目指します。



「自分の責任で自由に遊ぶ!」と書かれた標識

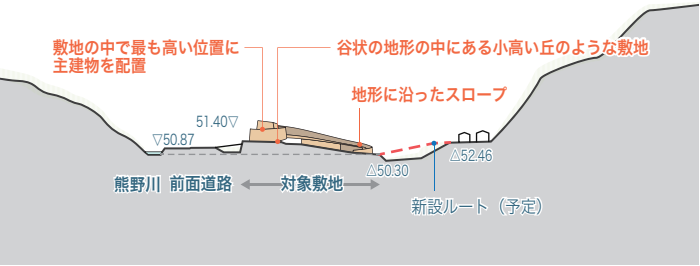
敷地の1番高いエリアに建築する

敷地には約1mの高低差があり、敷地内通路によって大きく2つのエリアに分かれます。標高の高いエリアに主建物を見て、分棟としても機能上問題のない屯所と防災倉庫を、道を挟んだ向かい側に立てる計画とします。



地形を読み解き、建物を安全に守る配置計画

本敷地は谷状地形において周辺より小高いことで、災害時にも被害を受けにくい場所であるという特徴があります。その特徴を生かし、敷地内でも最も高い場所に主建物を配置する計画がふさわしいと考えました。

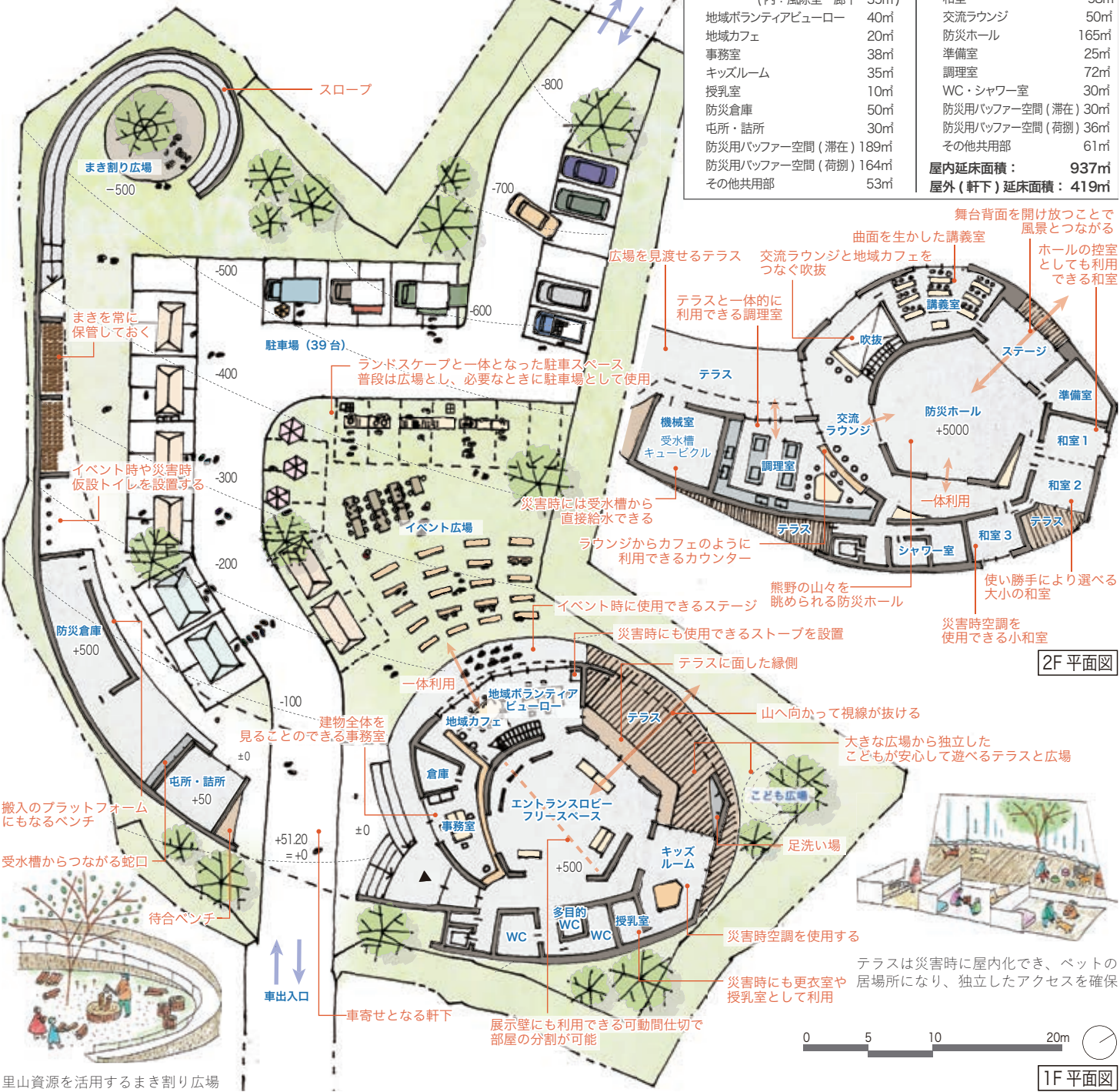


らせんの壁は水から建物を守り、避難動線となる

敷地の形状に沿って配置されるコンクリートの堅牢な壁は、万が一の水害の際にも水を受け流し、建物本体への浸水被害を防ぎます。また、長い壁を活かしてスロープを配置することで、停電時にも、車いすの方が2階まで避難出来る動線を確保するとともに、田園と一体となったやわらかい景観を生み出します。



イベント時や災害時にも、
ランドスケープと一体になって活用できる平面計画

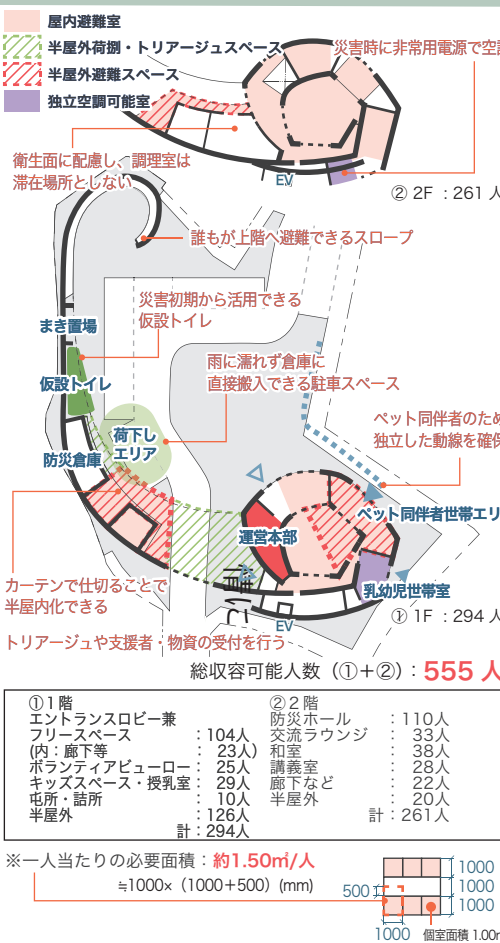


イベント時の屋外広場と軒下の使いこなしが、災害時につながる

避難時でも安心して過ごせる居住空間

長いスロープが活動の背骨となり、敷地全体を効率的に使える計画とする。

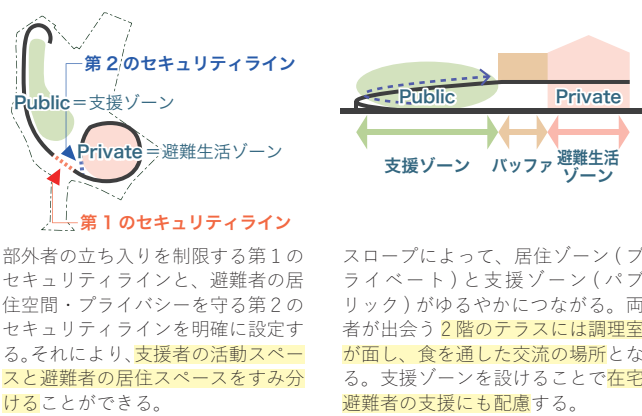
A. 指定緊急避難所：災害発生後 3 日目頃まで



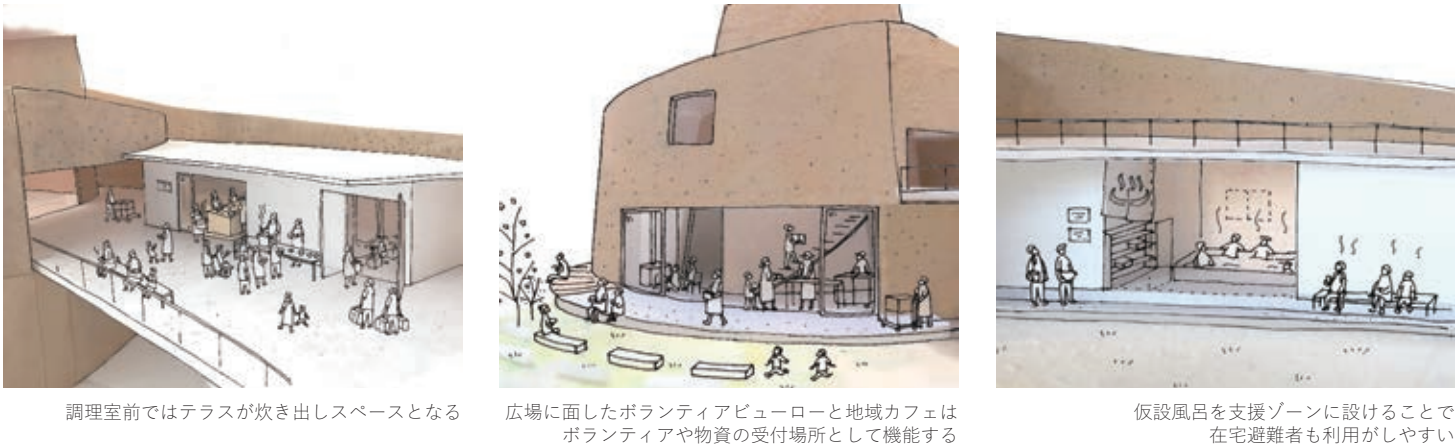
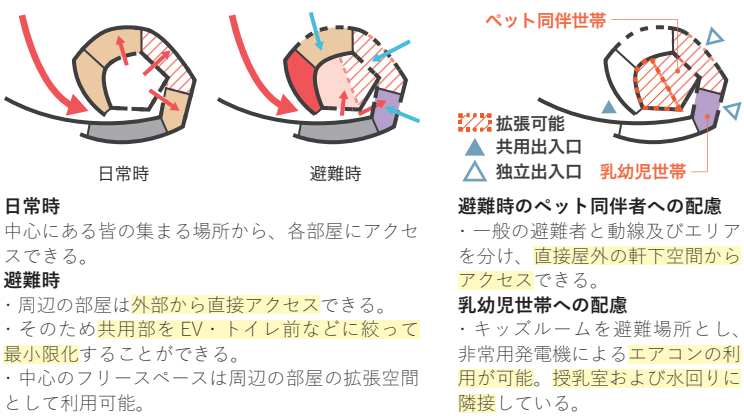
B. 指定避難所：災害発生後 3 日目以降



避難時でも安心して過ごせる居住空間



誰もが過ごしやすい柔軟なプランニング



調理室前ではテラスが炊き出しスペースとなる

広場に面したボランティアビューローと地域カフェはボランティアや物資の受付場所として機能する

仮設風呂を支援ゾーンに設けることで在宅避難者も利用しやすい

